

分離派100年研究会
連続シンポジウム 第1回

Arts and Crafts Movement以降の西欧の動向と日本への影響について
— 武田五一の活動を中心として—


2016.10.30

神戸大学名誉教授
足立 裕司

はじめに

当初、この研究会の講演を依頼されたときには「日本のセセッションとは？」ということでしたが、武田五一の活動について再検証しているうちに、彼の「セセッション」についての考えの背景にはイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動ないしはゴシック・リヴァイヴァルの影響があると考えるようになりました。

ここ数年検証してきた内容を皆さんに聴いて頂き、ご叱正をいただければと思い、今回のタイトルを選ばせて頂きました。



学位論文の構成 1
「世紀転換期の日本近代建築に関する研究
— 武田五一と第二世代の建築家の思想と作品 —」

序章
第1章 武田五一の建築観とその形成期 第1回渡航前
第2章 武田五一とアール・ヌーヴォー 第1回および第2回渡航中の活動
第3章 武田五一の建築作品とその建築観 作品の傾向から4期に分けて考察
第4章 日本近代住宅史における和洋折衷の系譜 主分野の一つである住宅作品について考察
第5章 転換期の建築活動 議院建築・F.L.ライトとの関係・和風建築
第6章 第二世代の建築思想とその歴史的役割

学位論文の構成 2

第3章 武田五一の建築作品とその建築観

1. 作品の系譜と変遷
2. 武田五一と日本の「セセッション」
3. 武田五一の作品における”新機運”の構図について
4. 武田五一の比例理論について
5. 新しい様式の模索と「日本的なるもの」
6. まとめ 後期作品と過渡期の造形

これまでの研究の要点

明治の第二世代の建築思想とその歴史的役割

1. 第一世代との違い、続く第三世代へと継承されたものとは？
2. 日本の建築伝統の研究と再評価
3. 西洋の建築様式の相対化と新たな様式の探求
4. 新しい建築素材の導入

過渡期的現象としてのアール・ヌーヴォーとセセッション


1. 西欧の新しい建築思潮の日本への影響
2. 住宅建築という分野への関心
3. 日本の近代建築史における過渡期の評価

↓

いくつかの残る疑問点

- ・ 武田五一とアーツ・アンド・クラフツ運動との関係
- ・ 渡航目的（図案研究）、人的関連（W.クレイン）、旧藏品
- ・ なぜアーツ・アンド・クラフツ運動が話題にならないか？

武田五一の多様性 → 世代の特徴、作風・活動の展開としてみる



古建築修復 住宅建築の改革者

初めての茶室研究・日本の伝統の復興・継承 議事堂建築の推進者

アール・ヌーヴォー・セセッションの牽引者 RC造・テラコッタ等の初期導入者

ライトの紹介者 京都高等工芸学校・帝国大学建築学科創設

近代的なデザイン教育

アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を考慮すると、
武田五一の足跡の多くが理解できる



アーツ・アンド・クラフツ運動についての言説

「近代におけるこの主義（構造主義）の最後の結果は、セセッション式となりて現れ来たるも、**其基く所は英のウィリアム・モリスの主唱に因ると見るを穩当とす**、十九世紀の初葉に於て大聲唱道せる所の者は、宜しく歴史的傳説を超越し現代の要求に應じて美的問題を解決すべく、且つ何れの關係に於ても虚偽の構造、或は空虚なる模造をなすべからず云うにありしなり。此青天霹靂の主張は、明らかに**中世峨嵋時主義の復活**にして而もよく當時様に依て胡蘆を画きつつある建築家に対して、頂門の一針たりしものなりしが、次第にその勢力を扶植し来りて、遂に英、佛、澳、獨の少壮建築家を覚醒せしめ、以て今日のセセッション式を大成せしむるの機運を作り出さしたり。」

（『建築美術界の三大流派に就て』『建築工芸叢誌』大正2年6月）



アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を起点として再考する必要

武田五一の建築観とアーツ・アンド・クラフツ運動

研究の経緯

- 2014年度近畿支部 論考 その1 (6)
アール・ヌーヴォーとの関係からアーツ・アンド・クラフツ運動との関係を基本とした考察の必要性
- 活動分野とアーツ・アンド・クラフツ運動の理念との関連
- 2015年度近畿支部 論考 その2 (7)
アーツ・アンド・クラフツ運動についての武田の言説
直接的な記述やスクラップ等の記述からの検討
- 2015年度大会 論考 (8)
日本におけるアーツ・アンド・クラフツ運動の影響はゴシック・リヴァイヴァルから再検討する必要があること
- 2016年度近畿支部 論考 その3 (9)
武田五一の建築観をゴシック・リヴァイヴァルからアーツ・アンド・クラフツ運動への展開として捉える必要がある
- 2016年度大会 論考 その4 (10)
武田五一の設計法におけるゴシック・リヴァイヴァルの影響について

日本では注目されなかったArts and Crafts Movement

- 1861年 Morris, Marshall, Faulkner & Co.の設立
- 1877年 古建築保存協会 (Society for the Protection of Ancient Buildings)を設立
- 1882年 Century Guildの設立 (A.H.Mackmurdoを中心にSelwyn Image, Herbert Home, Clement Heaton and Benjamin Creswickら)
- 1884年 Art Workers Guildの設立 (William Lethaby, Edward Prior, Ernest Newton, Mervyn Macartney, Gerald C. Horselyら)
- 1887年 Arts and Crafts Movementという概念の初出: T. J. Cobden-Sandersonが1887年の the Arts and Crafts Exhibition Society の会で用いる (出典 Alan Crawford, C. R. Ashbee: Architect, Designer & Romantic Socialist, Yale University Press, 2005)
- 1887年 Arts and Crafts Exhibition Society設立 (~1914年) 第1回渡航 1901~1903
- 1902年 著書: Triggs, Oscar Lovell "Chapters in the History of the Arts and Crafts Movement", Chicago 第2回渡航 1907~1908
- 1936年 Pevsner, Nikolaus "Pioneers of the Modern Movement from William Morris to Walter Gropius", London: Faber & Faber 1936
手仕事対機械、労働の価値、といったアーツ・アンド・クラフツ運動の既往の評価から一度離れて検討する必要

1. アーツ・アンド・クラフツ運動との機縁
曾禰達蔵からJ. コンドルを通じてW. クレインらイギリスのA&C運動とのつながりが形成された可能性



J.コンドルに宛てた曾禰達蔵の名刺

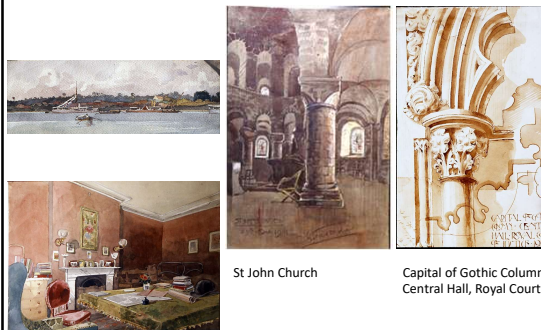
W.クレインの名刺

2. 旧贓品に見るアーツ・アンド・クラフツ運動についての記述

「Mr. Godfrey Blount's Principle」という人物に関するメモ
Godfrey Blount(1859 -1937)はモリスやラスキンの影響を受け、イギリスの南部の小さな町Haslemere にタペストリーの工房を設立。彼は、Kingに支えられ、ともに民俗的な工芸に価値を見いだし、1897年に「The Peasant Art Society (農民芸術協会)」を設立。



第1回海外渡航(イギリス)時のスケッチから



St John Church

Capital of Gothic Column, Central Hall, Royal Court

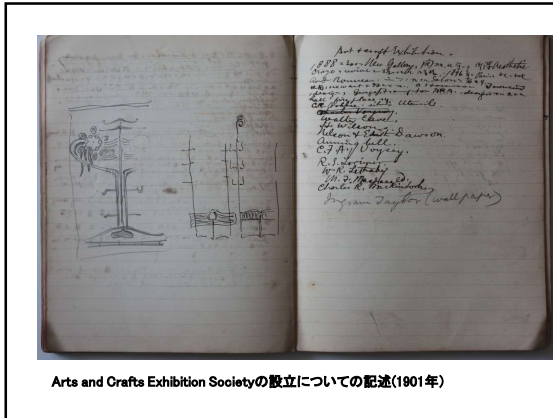
武田五一の旧贓品にみられるゴシック・リヴァイヴァルへの関心とその後の作品



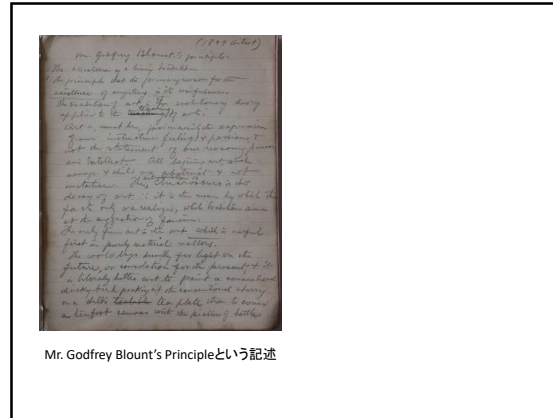
ダラム大聖堂のノッカー(左)

王立裁判所 (G. E. Street 設計)のスケッチ(1901)

ロンドン塔礼拝堂ステンドグラス



Arts and Crafts Exhibition Societyの設立についての記述(1901年)



Mr. Godfrey Blount's Principleという記述



身の回り、様々な事物への関心

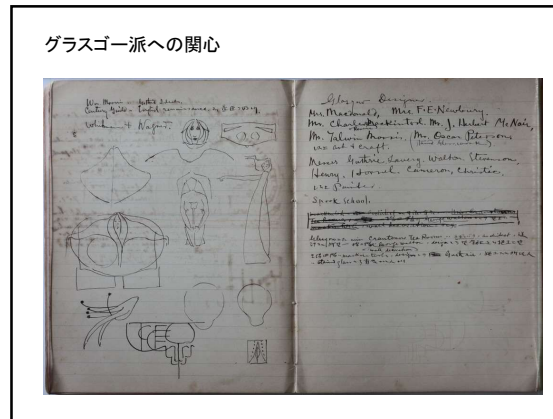
留学中の研究ノート
W.クレインの著書の抜粋
ペルシア建築の木造起源説をメモしている



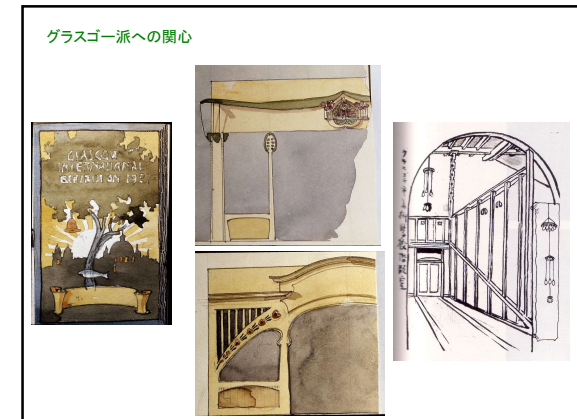
アーツ・アンド・クラフツ運動に連なる関心

クレインの装飾論に現れたsimplicityという概念について
「Note on simplicity of design in furniture by Gleeson White, Heal & Son」という小論のタイトルがメモ書きにされている。Joseph William Gleeson White (通称 Gleeson White, 1851 -1898)はスチューディオ誌の編集長を務めたこともある芸術・デザイン批評家であるが、この書は一般に公刊されているものではなかった。

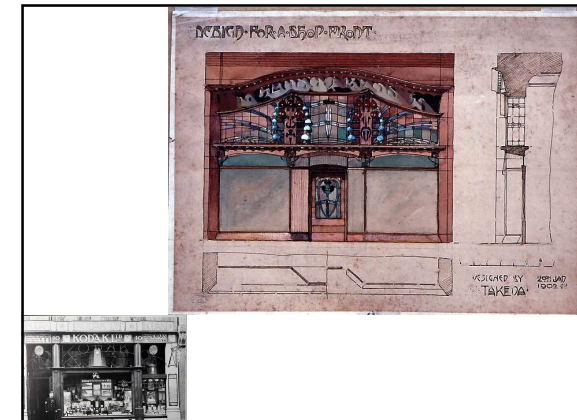
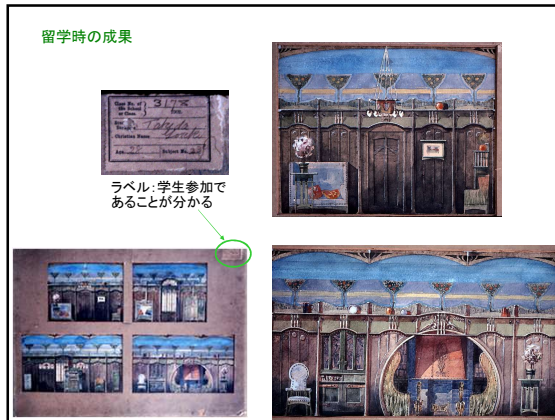
Simple Bedroom Furnitureの表紙(左)と中表紙



グラスゴー派への関心



グラスゴー派への関心



アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する言説

1911年に初めてアール・ヌーヴォーについての言説「世界に於ける建築界の新機運」

1912年に初めてゴシック・リヴァイヴァル、アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する言説以後、関連する発言がみられる

年次	著者	題名	掲載媒体
1909	田中一光	建築雑誌 104	建築雑誌 104
1911	田中一光	建築雑誌 106	建築雑誌 106
1912	田中一光	建築雑誌 107	建築雑誌 107
1913	田中一光	建築雑誌 108	建築雑誌 108
1914	田中一光	建築雑誌 109	建築雑誌 109
1915	田中一光	建築雑誌 110	建築雑誌 110
1916	田中一光	建築雑誌 111	建築雑誌 111
1917	田中一光	建築雑誌 112	建築雑誌 112
1918	田中一光	建築雑誌 113	建築雑誌 113
1919	田中一光	建築雑誌 114	建築雑誌 114
1920	田中一光	建築雑誌 115	建築雑誌 115
1921	田中一光	建築雑誌 116	建築雑誌 116
1922	田中一光	建築雑誌 117	建築雑誌 117
1923	田中一光	建築雑誌 118	建築雑誌 118
1924	田中一光	建築雑誌 119	建築雑誌 119
1925	田中一光	建築雑誌 120	建築雑誌 120
1926	田中一光	建築雑誌 121	建築雑誌 121
1927	田中一光	建築雑誌 122	建築雑誌 122
1928	田中一光	建築雑誌 123	建築雑誌 123
1929	田中一光	建築雑誌 124	建築雑誌 124
1930	田中一光	建築雑誌 125	建築雑誌 125

アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する言説

然れども風土の異同と国民性の差異は同一なる主義の下に努力する幾多の建築家をして自ら異りたる意匠を試ましむるに至り各国特有なる様式を作るの機運は勃々として欧米の天地に漲れり。

→(ペーリー・スコット、ポアセー、マツキントツシュ、ケペーをあげる)

英に於けるポアセー氏は英国本来の様式を基礎として之に自家の新意を加へマツキントツシュ氏、ケペー氏はスコットランド国風の趣味の上に立脚したる新意匠を試み・・・(略)

(オーストリアについては、ジョセフ・ホフマン、ジュリアス・マイエルエーデル、フリードリヒ・オーマン、ジョセフ・ワグネルをあげたうえで)

俄国アールヌーボー以外に一の新領土を開拓しつつあり其意匠軽快明瞭構造、材料と美的趣味の調和を計るに努力するところあり

→(セセッションの特徴についての初期的記述)

「世界に於ける建築界の新機運」明治45年4月

武田五一によるアーツ・アンド・クラフツ運動の評価

- 1) 「建築美術界の三大流派に就て」(『建築工芸叢誌』大正2年6月)
- 2) 「工芸美術瑣談」(『建築』187号、大正4年10月)
- 3) 『住宅建築要義』(文獻書院、大正15年刊)

武田五一の言説にみられるアーツ・アンド・クラフツ運動の記述

「近代におけるこの主義(構造主義)の最後の結果は、セセッション式となりて現れ来たるも、其基く所は英のウィリアムモリスの主張に因ると見るを穩当とす、十九世紀の初葉に於て大聲唱道せる所の者は、宜しく歴史的傳説を超越し現代の要求に應じて美的問題を解決すべく、且つ何れの關係に於ても虚偽の構造、或は空虚なる構造をなすべからず云うにありしなり。此青天霹靂的主張は、明らかに中世峨特式主義の復活にして而もよく當時様に依て胡蘆を画きつつある建築家に対して、頂門の一針たりしものなりしが、次第にその勢力を扶植し来りて、遂に英、佛、澳、獨の少壮建築家を覚醒せしめ、以て今日のセセッション式を大成せしむるの機運を作り出さしめたり。」

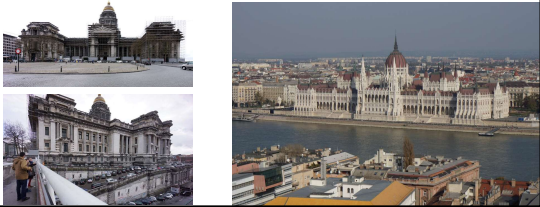
(『建築美術界の三大流派に就て』『建築工芸叢誌』大正2年6月)

武田五一による西欧建築思潮についての記述

1) 「世界に於ける建築界の新機運」『建築世界』明治45年4月-5月

建築様式の新機運は旧慣の打破と新規なる現代的要求を満足すべき様式の設立にあり之等の機運は近來に至て非常なる勢を以て世界の各地に試みられつつありと雖も其源を遠く十九世紀の前葉に発せり

例として ブリュッセルの裁判所(設計: Joseph Poelaert, 1883年)
 布ダベストの国会議事堂(設計: Steindl Imre, 1904年)



武田五一による新機運の評価(「世界に於ける建築界の新機運」明治45年4月)

	彫刻的分子の多少	外部色彩	内部色彩	応用サレタル建築物	建築工芸家(筆者加筆)
佛蘭アール・ヌーボー	非常ニ多シ	華麗	華麗	小規模なる商業建築、住宅	①
英蘭セセッション	少シ	淡泊	淡泊	官衙、商業建築、住宅、学校	②
獨逸モダルネクスト	多シ	淡泊	華麗	商業建築、住宅、学校	③
伊國	多シ	華麗	華麗	官衙、商業建築、住宅	④
英國	極メテ少シ	淡泊	華麗	商業建築、住宅、学校	⑤

例として掲げられている建築・工芸家

- ① ビネー、ビング
- ② オットー・ワグネル、ホフマン、オーマレ、ハンス・クリスチャンセン、ピーター・ペーレン、ルドキッヒ・ハビツヒ、ルドルフ・ポツセルト、バトリッツ・ヒューバー、ゼーエム・オルプリヒ
- ③ ブルノ・パウワル、バンデル・ベルド、グレナンドー
- ④
- ⑤ ボアッセー、マツキントッシュ、ケツビー、ペーリー・スコット

イギリスの新機運をどう評価しているか

彫刻的分子の多少 極メテ少シ
 外部色彩 淡泊
 内部色彩 華麗
 応用サレタル建築物 商業建築、住宅、学校

例示されたイギリスの建築・工芸家

ボアッセー C. F. A. Voysey (1857-1941)
 マツキントッシュ C. R. Mackintosh (1868-1928)
 ケツビー John Keppie (1863-1945)
 ペーリー・スコット Mackay Hugh Baillie Scott (1865-1945)

武田五一「建築と色彩」(『建築雑誌』明治44年4月)

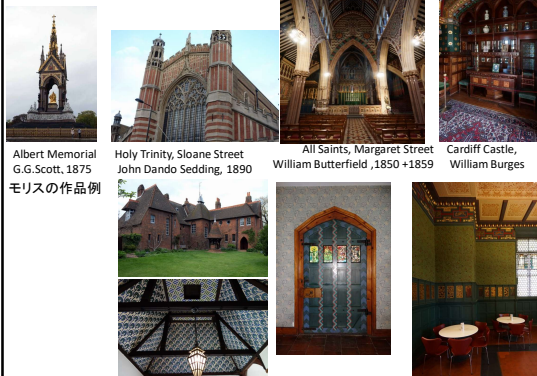
「建築に対する色にも二つの見方があるかと思ふ、それは材料の方面から見た色と、応用する方面から見た色とであります」(p.262)

材料の色 構造的材料 石、鐵、木・
 表面材料 ベンキ、漆、洗
 ※虚偽的構造の部類に属するものであつて品のいいものは出来ない、...永久的の材料ではない
 上記の中間 裝飾煉瓦、モザイクに使う大理石
 ※あまり高尚なものでもない

応用的の色 材料の色を応用して一の裝飾にする

↓
 イギリスのゴシック・リヴァイバルの建築家の作品: 外部は裝飾煉瓦
 モリス: 内部の華麗
 アーツ・アンド・クラフツ運動につながる建築家の作品: 応用的の色

ゴシック復興の作品例



作品について

セセッション式と称される武田五一の作品にみるアーツ・アンド・クラフツ運動、またはゴシック・リヴァイバルとの関係について

- ・ 西欧の新しい建築思潮を受けて、西欧一辺倒であった第一世代に対して、日本的な解釈を加えることができる形態的特徴を用いた第二世代の建築家達の折衷の様式 → ドメスティックな傾向
- ・ ゴシック・リヴァイバルから直接的に影響を受けたような作品はほとんどないが、ロマネスクを基本とする作品は卒業設計以来、いくつもみられる。

福島行信邸

—日本のセセッション建築の嚆矢—



名和昆虫記念館(1907年)



求道会館(1915年上棟)

初期案にはビザンチン風の意匠がみられるが、実際に建った建物はロマネスクを基本としたセセッション。

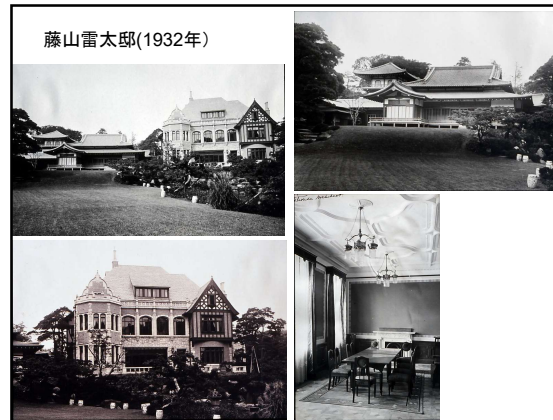
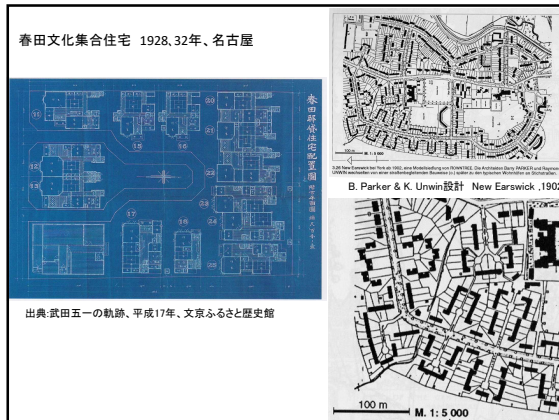


同志社女子大学
ジェームズ館(1914年)



兼松記念館(神戸高等商業学校(1921年)





武田五一の重視した住宅という領域

日本家屋のよさは否定できない: **慣習・風土**

↓

洋室(イス座)は避けられない: **利便性・合理性**

↓

快適さを提供する上で、近代的な設備は欠かせない: **機能・技術**
 照明(灯油→ガス→電気)、水廻り(台所、便所、洗面他)

↓

…如何なる大規模の建築、絶後の傑作があらうとも、住宅建築の完全なる発達榮耀を持たない間は、件の様式そのものの完全なる発達は固より望み得ない…(中略)…住宅建築なるものはその規模壮麗の点に於いて、或は公共記念宗教等の建築に対して一棟一郭として及ばない事も多いが、建築界を左右する実勢力に至つては、数の多大と人間社会が持つ文化に直接的なだけ、他の如何なる建築にも増して建築界主要部分を構成している(上掲『住宅建築要義』緒言より)

日本人のための住宅はどうあるべきか？

日本家屋のよさは否定できない

+
 西洋化していく社会にあつて洋室(イス座)は避けられない

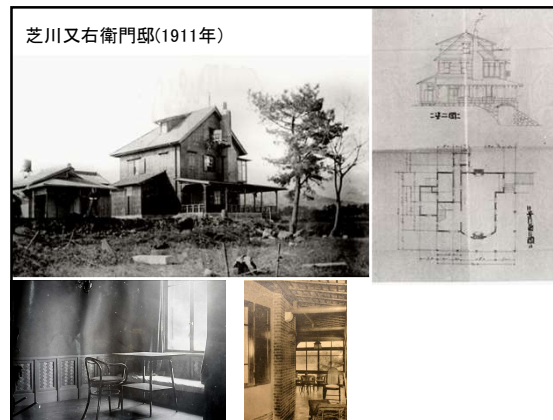
+
 (快適さを提供する上で、近代的な設備は欠かせない)
 照明(灯油→ガス→電気)、水廻り(台所、便所、洗面他)

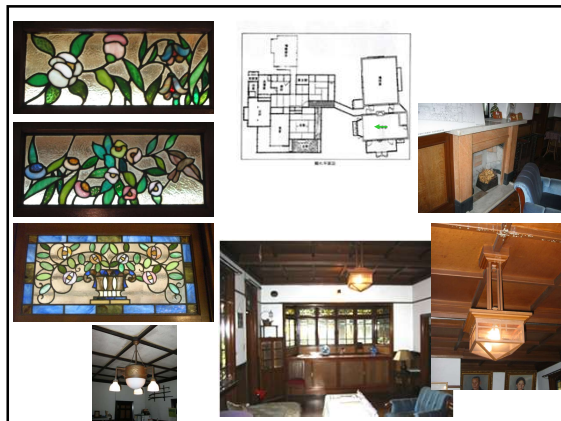
↓

日本人の身の丈に合う住宅としての和洋折衷とは？

↓

身の回りのすべてをデザインしようとしたアーツ・アンド・クラフツ運動と共通する傾向





再考: アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する言説

1911年に初めてアール・ヌーヴォーについての言説

1912年に初めてゴシック・リヴァイヴァル、アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する言説以後、関連する発言がみられる

1901~03年にかけての最初の渡航で見聞きしたから10年弱遅れた発言をどう解釈するか

渡航前にすでに行っていた格好(プロボーション)の研究に含まれていたゴシック・リヴァイヴァルの設計法例 J.GwiltのVesica-piscis

年次	著者	書名	内容
1907	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1911	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1912	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1913	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1914	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1915	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1916	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1917	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1918	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1919	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1920	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1921	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1922	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1923	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1924	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1925	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1926	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1927	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1928	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1929	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された
1930	建築評論家	建築雑誌	「建築」誌に「アール・ヌーヴォー」の言説が掲載された

渡航前の武田五一についての再考

卒業設計について

卒業設計にみられるネオルネサンス的な形式とロマネスク風のアーチの処理

↓

Free Styleの傾向

卒業設計の再評価

Free Classicism
Late-C19 English style, essentially a mixture of Classical, Mannerist, Renaissance, and Baroque motifs. Examples include John Mackean Brydon's (1840-1901) Chelsea Town Hall, London (1885-7), and Government Offices, Whitehall, London (1898-1912), the latter perhaps more Baroque. 作例 Roman Baths, Bath の入り口

Free Gothic
1. Revival of Gothic forms and motifs, freely used in an eclectic mix, as in the Midland Grand Hotel, St Pancras Station., London (1868-74), by George George Gilbert Scott.
2. Late-C19 style, in which Arts-and-Crafts and other influences were mingled, creating individual style. Examples include work by Carøe, Temple Moor Charlis Nicholson, Sedding, Show, and others.

Free Style
Late-C19 style in which classical, Domestic Revival, Gothic, Queen Anne, and vernacular themes, motifs, and elements were mingled promiscuously in eclectic compositions, sometimes which additional Elizabethan or Renaissance allusions added, as in the works of Philip Webb (especially 'Clouds' East Knoyle, Wiltshire (1879-91) 出典: Oxford Dictionary of Architecture

武田五一が所持又は講読した図書 (武田五一旧贓品 及びノート類)

W. Crane
The Bases of Design, 1898, London
(滞欧中のノートに内容が書き写されている)

Members of the Arts and Crafts Exhibition Society
Art and Crafts Essays, 1893, (序文はW. Morris)

L. Day
Some Principles of Every - Day Art, 1898, London
(武田五一のサイン有, 1901の日付)

G. Gwilt
Encyclopedia of Architecture, 1867, London
(1842年初版, 1845年ゴシックの項目を追加, 武田五一の論文「建築の格好に就て」で参照)

A Handbook of Ornament, 1896, Meyer, London
(武田五一のサイン, 1901年の日付入, 現Doverからリプリント版有り)
Glasgow International Exhibition 1901- Official Catalogue of Art Object

A.H.Church
Colour, 7th Edition, 1897, Cassel & Company Limited

M. E. Chevreul
The Law of Contrast of Colour and their Applications to the Arts and Manufactures
(武田五一のサイン有, 工科大学(左), 帝国大学(中), 神戸大学の印(右)有)

B. F. Fletcher & H. P. Fletcher (右)
The English Home, 1910, London
The Industrial Arts, 1st ed. 1876, London (武田のサイン, 1901)

Vittorio Pica
L'Arte Decorativa - all' Esposizione di Torino del 1902, 1903, Bergamo
(1902年トリノ博覧会のカタログ, 当時最新の情報が網羅されている)

R. D. Benn
Style in Furniture, 1910, London
Greeson White ed. Practical Designing - Handbook of Preparation of Working Drawings, 1893, London (武田五一のサイン有)

R. D. Benn
Style in Furniture, 1910, London

Greeson White ed.
Practical Designing - Handbook of Preparation of Working Drawings, 1893, London
(武田五一のサイン有)

ENCYCLOPÉDIE D' ARCHITECTURE II volume, VE A. MOREL & CIE LIBRAIRES-ÉDITEURS

Heat and Abrasion Glass Working

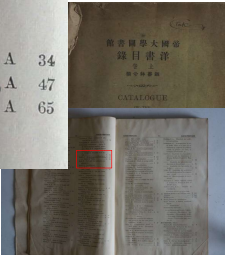
Instructive and Ornamental Paper Work

The Bed Room and Boudoir

武田五一が閲覧することができた図書
 (帝国大学洋書目録 1898年 Takedaのサイン有)

Architectureの分野
 H. P. Gosses Japan: its architecture, art, and art manufactures
 Rudimentary architecture. Leeds, W.
 H. Orders and their aesthetic principles.—Bury, T. T. Styles of various countries and periods.—Garbett, E.
 L. Design as deducible from nature A 34
 Ryde, E. Text book for architects, engineers, &c.
 R. E. Street Brick and Marble
 Gothic Architecture
 Viollet-le-Duc Entretiens sur l'architecture
 Habitations modernes

Artの分野
 W. Burges Art applied to Industry
 G. C. Mason Application of art to manufactures

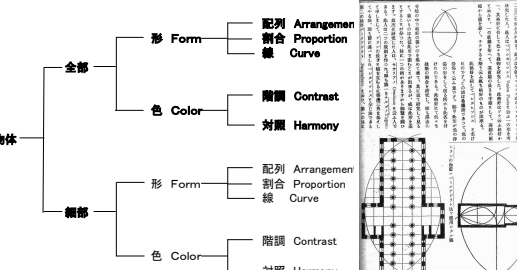


武田五一の初期の建築理論

(1) 茶室にこめられた高度な建築意匠の発見
 (2) 木割という規範の成立に伴う意匠の質の低下という問題
 (3) 木割の問題点としての全体のプロポーションを決める方法の模索
 (4) 和洋の建築の基礎としての形式美の原理的探究

物体

- 全部
 - 形 Form
 - 配列 Arrangement
 - 割合 Proportion
 - 線 Curve
 - 色 Color
 - 階調 Contrast
 - 対照 Harmony
- 細部
 - 形 Form
 - 配列 Arrangement
 - 割合 Proportion
 - 線 Curve
 - 色 Color
 - 階調 Contrast
 - 対照 Harmony



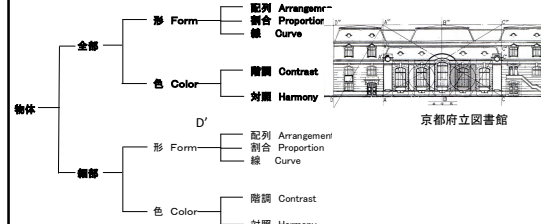
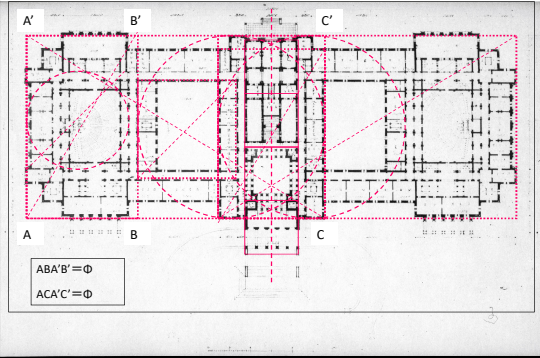
(4) 和洋の建築の基礎としての形式美の原理的探究

→ 形式の分析については、G. Gwilt "Encyclopedia of Architecture", 1867 (1842年初版、1845年版でゴシックの項目を追加)を参照している。
 武田所有の帝国大学校蔵書目録にはないが、現東京大学稀覯本目録には記載されている
 → 色彩についても上記、M. E. Chevreul "The Law of Contrast of Colour and their Applications to the Arts and Manufactures" やA.H.Church "Colour, 7th Edition", 1897を参照していると考えられる

物体

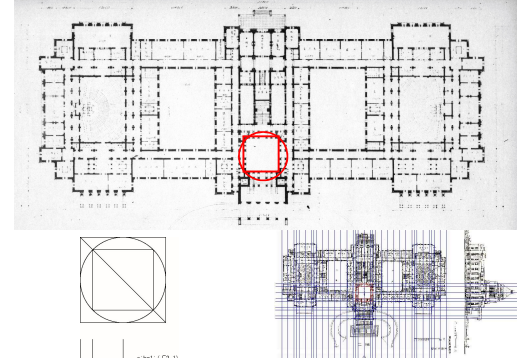
- 全部
 - 形 Form
 - 配列 Arrangement
 - 割合 Proportion
 - 線 Curve
 - 色 Color
 - 階調 Contrast
 - 対照 Harmony
- 細部
 - 形 Form
 - 配列 Arrangement
 - 割合 Proportion
 - 線 Curve
 - 色 Color
 - 階調 Contrast
 - 対照 Harmony

京都府立図書館

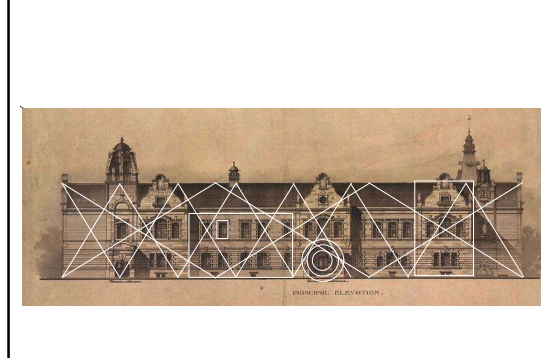



ABA'B' = φ
 ACA'C' = φ

第三期初期案の形式分析



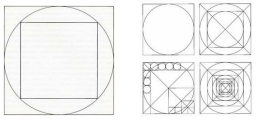
φ = 1.618



PRINCIPAL ELEVATION


なぜ、格好に就いて研究する必要があったか？

古典主義を遠ざけたときに必要となる設計術として、「格好」の分析を行ったと考えられるが、古典主義に代わる設計術は当時の世界的な関心事であったともいえる。



H. P. Berlage Egyptian triangle grid, Amsterdam, 1898.

J. L. Mathieu Lauwerik (1864-1932)の基本図



このグリッドシステムはV. L. Ducの建築講話の図版で最初に紹介されたというが、未確認

Exhibition for Christian art, Dusseldorf, 1909.

補遺：アーツ・アンド・クラフツ運動とJ.コンドルの教育

武田五一の旧蔵品にある「帝国大学蔵書目録」によると、かなりのゴシック・リヴァイヴァルに関連する図書、あるいはアーツ・アンド・クラフツ運動に関する図書が所蔵されていたことがわかる。逆に古典建築に関する図書が少ないように思われる。

現東京大学建築系図書室にある稀観本控えと比べると、追加されている図書がある反面、ゴシック・リヴァイヴァル、アーツ・アンド・クラフツ運動関連の重要図書のいくつかが欠けていることが確認された。

関東大震災時の紛失があるというが、コンドルの持ち込んだ図書が相当数あるのでは考えられる。

つまり、武田五一は第一回の渡航前にイギリスのゴシック・リヴァイヴァル、あるいはアーツ・アンド・クラフツ運動に関連する動向について、知識を有していたともいえる。

アーツ・アンド・クラフツ運動とJ.コンドルの教育

コンドルの指導に直接的なアーツ・アンド・クラフツ運動の言及はないが、

- ・住宅という課題の重視
- ・住宅を通じて歴史や伝統・習慣(国民性)、気候・風土、効用性に関連する課題を通じて日本の建築家の理念形成を行おうとしたコンドルの建築観

↓

- ・ゴシック・リヴァイヴァルの建築家達への影響をみることはできる。
- ・東京大学所蔵の工科大学卒業論文にみられる論文構成の同質性
- ・日本人教師が就任する頃には工学的なテーマへと明確に置き換わる
- ・武田五一の卒業する明治30年前後に再び同じテーマが復活

↓

当時の日本の建築家の論考にみられる概念の分析と論理構造の分析から広い意味でのアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を検討する必要

コンドルの指導を受けた第一期生から続くゴシック・リヴァイヴァルの影響

期	西暦	年	氏名	題名
第1期	1879	明治12年	藤野金吾	Thesis on the future domestic architecture of Japan
			片山重雄	Essay upon the future domestic houses suitable to Japan
			佐立七次郎	Thesis on the future domestic architecture of Japan
第2期	1880	明治13年	菅原清成	Thesis on the future domestic architecture of Japan
			藤本秀吉	Essay on foundations
			渡辺謙	—
第3期	1881	明治14年	坂本復経	—
			久原正通	History and Theory of Japanese architecture
			小澤基和	—
第4期	1882	明治15年	新堂孝正	Japanese bricks, and timbers used in building operation
			島居勇助	Japanese building stones
			中村達太郎	Climate conditions which should govern buildings in Japan
			菅原石松	Japanese ornament
			河合清成	Useful art and history of art of Japan
第5期	1883	明治16年	吉澤及太郎	Building material in Japan
			松尾敏敬	The adaptation European architecture
			渡辺謙	Future architecture in Japan
			渡辺晋	Improvement of town dwellings
			森川龍一	Essay on sanitary engineering
第6期	1884	明治17年	—	—
			—	—
第7期	1885	明治18年	渡辺五郎	Health, comfort and cleanliness in the house
第8期	1886	明治19年	田中豊輔	Japanese timber
第9期	1887	明治20年	—	—
第10期	1888	明治21年	中島義次郎	Design for the House of Parliament.

英文の工科大学卒業論文を翻訳しませんか？